

## アイヌ遺骨に関する日本人類学会の声明

一般社団法人日本人類学会は、自然人類学に関連する諸分野の研究者を中心とした学術団体として、人類学上の事項を研究し、これに関する知識の交流をはかることを目的に活動して参りました。自然人類学の主たる研究テーマの1つに、遺跡発掘人骨の分析から人類の壮大な歴史を読み解くというものがあります。しかし近年、その一環として、一部の人類学者が過去に行ったアイヌ遺骨の収集とその保管のあり方、さらに研究成果の共有等に倫理上の問題が認識されるようになりました。本会は、過去20年ほどに渡って、その対応にあたって参りましたが、このたび、この重要な課題について本会の見解を示し、アイヌの方々にお詫びの意を示すとともに、自然人類学者によるこれまでのアイヌ遺骨の研究を振り返り、現代を担う学術団体及び研究者としての責務を問い合わせすべく、本声明を発表いたします。

わが国の自然人類学者による、日本列島の人の起源をめぐる研究がはじまったのは、明治時代のことです。その基礎資料となったのは遺跡発掘等を通じて得られる人骨で、日本列島各地においてその収集が行われてきました。その一環として、一部の研究者が、アイヌ遺骨の収集を行っていましたが、その中には、盗掘のような、適正な手続を踏まずに収集した事例があり、近年では、このような遺骨収集に対する倫理上の問題があると指摘されています。

本会は、2005年より、北海道ウタリ協会（現在の「北海道アイヌ協会」）と協議を重ねつつ、この課題にどう向き合うべきかの検討をはじめました。2010年には本会内に「先住民遺骨委員会」を設置し、国内各大学におけるアイヌ遺骨の保管状況等を独自に調査し、同協会へ調査結果を報告しました。その後、日本政府の主導によりアイヌ遺骨問題への対応が始まる中で、その一環として、2015年から、北海道アイヌ協会、日本人類学会、日本考古学協会で構成する「これからの中のアイヌ人骨・副葬品に係る調査研究の在り方に関するラウンドテーブル」が置かれ、問題の核心ならびに研究者として反省すべき点等について、多くの議論を重ねた上で、2017年4月には、それ

らを報告書にまとめて公表しています。その報告書では、上述の遺骨収集の問題、資料の保存管理上の問題点が指摘されたのみならず、アイヌの方々への配慮が十分でないまま研究が行われ、その成果を十分に還元してこなかったこと、先住民族問題・差別の問題と関わる意識の欠如があったことを確認し、批判を真摯に受け止め、誠実に行動していくべきと記しています。

さらに 2018 年からは、上述の 3 団体に日本文化人類学会が加わり、ラウンドテーブルに付属する「研究倫理検討委員会」準備委員会において、これからの中のアイヌ研究のあるべきかたちについて検討を続けています。そして、2021 年には、本会内に研究倫理委員会を設置し、アイヌ遺骨の課題を含む、人類学研究における倫理について議論しています。

本会を含め、アイヌ遺骨の倫理問題に対して学術団体や個々の研究者が真摯に向き合い、遺骨返還を含む問題解決に向けて取り組みが進みつつあることは歓迎すべきでしょう。しかし、ここに至るまでの道のりは長く、その間にアイヌの方々を苦しめてきたと言わざるを得ません。アイヌ研究を志した個々の研究者は、アイヌの方々に対して配慮して研究をしてきた者もありますが、以下にも記すように、総じて、本会も個々の研究者も、長い間、この問題に自覚が乏しく、研究される側への配慮が不十分な状態であったことを否めません。

日本列島の人の起源をめぐる研究は、まず幕末から明治時代に来日した欧米研究者によって、次いでそれに触発されるかたちで、わが国の自然人類学者によってはじめられました。その頃から注目されていたのは、日本列島各地でみつかる石器時代（今でいう縄文時代）の人々と、アイヌおよび和人との関係でした。当初は、主に伝説などにもとづいて、石器時代人をアイヌとも和人とも関連がない先住者とみなす「コロボックル説」などが唱えられました。その後、人骨の形態解析が始まってより科学的な研究が行われるようになり、次第に縄文時代人とアイヌとの強い関連性が明らかになってきました。さらに九州・四国・本州では、弥生時代以降に大陸からやってきた渡来系集団と在地の縄文集団が、概ね前者が優勢なかたちで交わったのに対し、北海

道においては基本的に縄文集団がアイヌの祖先となったことが示され、当地におけるアイヌの連續性が確認されました。このシナリオは、近年の遺伝学的解析からも支持されています。総じて、人類学および関連科学の研究成果は、アイヌが日本列島北部周辺、とりわけ北海道の先住民族であるという、今日の日本政府見解を裏付けるものとなっています。

しかし一方で、自然人類学者は、研究対象としてきたアイヌ遺骨の入手経緯に関する問題意識が薄く、これに対し当事者のアイヌの方々がどのような想いでいるかを深く考えてはきませんでした。さらにこうした研究成果を、アイヌの方々の声を聴きながらアイヌコミュニティと共有していく努力をしてきたのかと言えば、たいへん心もない状態にあります。自然人類学の研究成果は、本来、人の多様性に対する理解を促し、他集団への誤解や偏見を軽減し、差別を是正する力をもっているはずですが、それを十分に活用し社会還元できていない現状には、悔いが残ります。

本会は、人類学の発展に寄与した学術団体として、こうした歴史と現状実態を重く受け止め、真摯に反省し、心を痛めてこられたアイヌの方々に心よりお詫び申し上げます。今後においても、上述の反省点を踏まえ、研究する側と研究される側との共通理解に基づく、本来あるべき研究のかたちを、絶えず模索して参ります。

2025年12月15日 一般社団法人日本人類学会